「車輪の下」を読んで

上原中学校　三年二組　　大野　千花子

実は、この小説を読んだのは今回が初めてではない。小学四年生の頃、何を間違えたか読書感想文の題材にしようと思って読んだことがある。当時はまだ、メアリー・ポピンズだとか、赤毛のアンだとか、二年間の休暇などといった児童文学を主に読んでいた。だから、本の内容を理解できず、「ハンスがかわいそうでした。」というような単純な感想しか持てなかった。でも、中三であり、受験生となった今では、考えが変わった。

まず、当時の学校制度に対するヘッセの批判的な考えが、小説全体にあふれていることに気がついた。主人公ハンスが通うことになった神学校は、個性を重んじず、集団にそぐわない生徒は徹底的に差別するような学校だった。ハンスは徐々に落ちこぼれていくのだが、その様子はどのシーンよりも細かくかかれている。ハンスが無気力になっていく様子は読んでいて痛ましいほどだった。それなのに、ハンスを救おうとせず、むしろ追いつめていく教師たちには怒りを覚えた。この情景や心理をえがくことによって、ヘッセは不合理な学校環境を暗に批判したのかもしれない。

ヘッセは同じように試験勉強についても批判的だと感じた。つりやうさぎを飼うことを禁じられている中で、勉強していたハンスは常に頭痛がし、イライラしていた。楽しみを奪われたら誰だってストレスが溜まっ

てしまうだろう。彼は常に苦しんでいた。そのためか、顔色は悪くなりやせこけてしまう。勉強は彼を不健康にするばかりだった。それは、親子の対立を生む原因ともなる。一日目の試験のできに不安を感じているハンスに向かって、父はののしり始めた。ハンスもかっとなって一言。「おとうさんなんかギリシア語、ちっともわからないじゃないか！」当然の成り行きと言えよう。これでは余計にストレスが溜まるばかりだ。このような情景を余すところなく表現する点が、この小説の素晴らしさである。また、文章は直接的な批判ではなく、あくまで読者に感じとらせる文章なのだ。

私がこの小説で最も印象に残った一場面がある。ハンスの埋葬の場面で、靴屋のフライク親方がハンスの父ヨーゼフに話しかける場面だ。「靴屋は、墓場の門をでていくフロックコートの連中を指さした。『あすこをあるいていかれる二、三の紳士がたも、』と、彼は小声で言った。『お子さんをこんなめにあわせる手つだいをなさったわけですよ。』」父ヨーゼフはその後、フライク親方の言葉を全く理解できていない。結局全てを見通せていたのは、フライク親方だけだったのかもしれない。教師たちによる教育は、彼にただただプッシャーを与え続けてしまったのだ。この場面でのフライク親方の言葉は、ヘッセがこの小説の中でかいた、社会に対する皮肉であり、最も直接的で、批判的な言葉であるように思う。

しかし、この小説には対照的に明るい描写も多くある。特に、秋の果汁しぼりの場面では、にぎやかな町の様子が感じられる。何より、描か

れる美味しそうなりんごが食欲をそそり、お腹がすいてくるのだ。ヘッセが庭仕事を好んでいたこともあるからか、川の流れ、木々の色、小鳥のさえずり、どれもが目を閉じなくとも、頭に情景を思い浮かべられるほど、細かく表現されている。自然、そして季節の移ろいがありありと感じとれる。また、ハンスの初恋と失恋は甘酸っぱくて切なくて、こっちまでドキドキしてしまう。ハンスは、勉強と神学校生活のために、不器用だったから、恋という要素が刺激的だったのだろう。この恋は文章としては激しい描写がないものの、このような背景からか、現実味があり、自然と感情移入できてしまう。そもそも現代の小説は描写が刺激的過ぎる。だからこそ、この小説のしっとり感は私にとってちょうどよいと思えた。

この小説は感情などの明暗や自然の情景が織り交ぜられて構成されているので、読んでいて飽きない。最終的には、暗く悲しい話なのだが、全体を通して暗過ぎることが、けっしてないのだ。それこそ、この小説が長い間読み続けられている一つの理由だと思う。

私はこの小説を通して、受験勉強について考えさせられた。ハンスの最大の失敗は、おそらく勉強にかまけ過ぎて、この先にあることをしっかり見すえなかったことだと思う。だから、勉強する意味がわからなくなり、結果的に最悪の事態となってしまったのだ。高校進学は人生の通過点にすぎない。目の前だけに捉われず、もっと広い視野で自分の将来を見すえていきたい。ハンスのように人間性を失わないためにも。